

弘前大学イングリッシュ・ラウンジの高大接続の取り組み： オンラインで広がる新しい社会貢献

Connecting High School Students with College Education at Hirosaki University:

Expanding Outreach Through Online Education

ヤグノ・ライク, 多田 恵実, ソロモン・ジョシュア・リー
片桐 早苗, バードセール・ブライアン・ジョン

Reik Jagno, Megumi Tada, Joshua L. Solomon, Sanae Katagiri, Brian J. Birdsell

弘前大学 教育推進機構

Institute for the Promotion of Higher Education, Hirosaki University

Abstract

This activities report discusses the development and instruction of a new high-school English education outreach program run by the Self Access Learning Center (named, The English Lounge), which is a part of The Center for Liberal Arts Development & Practices at Hirosaki University, beginning in the spring semester of 2021. The English Lounge was selected to pilot this program due to its variety of current special seminars offered to Hirosaki University students and past activities that include Faculty Development for using digital technology in the classroom and community outreach projects. For this initial pilot program, students were limited to Hachinohe High School and Aomori High School and involved two different learning opportunities. First, high school students were invited to remotely participate in English Lounge seminars during the university's spring semester. Then, during spring break, they joined a two-day weekend workshop designed to provide a culminating experience to the first semester. This report outlines the process of designing the program, reports the results of this pilot semester that had a total attendance of 369 high school students, and reflects on individual successes and failures in this hybrid teaching context.

Keywords: 高大連携, 高大接続, オンライン教育, 地域貢献

弘前大学イングリッシュ・ラウンジ (以下, EL) は2021年度前期, 青森県の二つの高等学校とELをオンラインでつなぎ, ELのセミナーを高校生に公開し, 高校生が放課後に気軽にオンラインで参加できる講座を, 2021年5月から試行として始めた。前期4セミナー, 週4回, 計38回のセミナーにより前期は延べ人数223人の高校生が参加し, 前期アンケート結果では, 参加高校生から, また両校の高等学校教員からも, 英語によるコミュニケーション能力の育成の場として高い満足度が示された。また, 9月には2週にわたり, 特別ワークショップを開催し, さらに延べ146人の高校生が参加し, 総計369人の参加となった。その総括を今後の展望とともにここに報告する。

背 景

文部科学省GIGAスクール構想（2019）はコロナ禍によりさらに加速され、2021年3月当時、青森県の高等学校ではICTのインフラストラクチャー、高速大容量Wi-Fiや生徒用端末の準備が整いつつあった。青森県教育委員会との連携協定（2015）に基づき、高大接続の取り組みの一環として、本学教育担当理事・副学長・教育推進機構長である郡千寿子の命により、ELを活用した高校生のための遠隔オンラインセミナーが提案された。高校生の英語能力伸長とともに、大学生と共に高等教育を経験し、大学教員の指導や在学中の大学生のアドバイスを受けることで、高校生が次の進路を考えるための助けとなる。

ELは本学学生が在学期間中、継続的に自ら実用的な英語コミュニケーション能力を身につけていくことをサポートするために設立された自律学習施設である。外国人と日本人の教員が、あらゆるレベルの学生の自律的な英語学習を支援するための多様なセミナー、多言語イベント、各国からの留学生との会話サークル等を行っている。

テクノロジーの面においてELは、コロナ禍の始まり2020年の春に、県内高等学校からの要請で、弘前大学と当該スーパーサイエンスハイスクール実施高等学校とをオンラインでつないだ理科の研究発表会や留学生交流会などの実現に向け、高等学校教諭を対象にオンライン教育についての職員研修を行った経緯がある。英語教員でありながら、オンライン技術に詳しい複数の教員がいたことと、高等学校にFDを行った経験が本プロジェクトへの関わりへのきっかけとなった。

高校生が放課後の空き時間にインターネットでオンライン配信技術を使うことにより、大学の教育セミナーに参加することが可能になり、大学の教育を直接、進学前に体験することができる。高等学校とは異なる教育スタイルを実際に体験することで将来の進路を探る手がかりとなる、という見通しの許に企画を進めていった。特にこの企画は、高等学校教員によれば、コロナ禍の許、高等学校の海外研修が軒並みキャンセルされ、外国語指導助手が入国できない等の理由で、直接ネイティブスピーカーの教員から海外の文化を学習する機会が減っている中、高校生の英語力を訓練し、国際感覚を養う絶好の機会であると高等学校側には高評価を得ている。

文部科学省（2018）は「高大接続改革においては、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を通じて学力の3要素を確実に育成・評価する、三者の一体的な改革を進めることが極めて重要」であるとし、「これらの改革に向けての取り組み」は大学教員にとっても差し迫った課題となっている。また、高等学校までの学習指導要領について大筋ではわかっているが、時代のアップデートなしに現在、高等学校でどのような教育が実際に行われているのか、詳細を知らずに大学での授業を行っている場合もままある（鈴木、2018）。大学教育直前の公教育の姿を知ることは大学教員にとっても、今後の授業内容を改善していくためにも必要なことであると再認識することになり、このようなプロジェクトは多くの示唆を与えてくれた。

2021年度前期のセミナー

概要

高校生の為にELセミナーを開放する試行は、オンラインを通じて、弘前市以外の遠隔の青森県内からの高校生も参加させることができ、コロナ禍の中でも高校生は自宅から安全に弘前大学の教育環境を体験することができる。いわばオンラインで「体験入学」的要素が期待できる。

計画したセミナーは表1のようになる。図1は大学で行っている大学生のためのELセミナーの全体像を示しているが、その中の一部、夕方近くに行われるセミナーの一部を高校生にオンラインで提供することとした。企画当初は週3回火曜日から木曜日の5時40分から6時40分までとしたが、受講希望者が多かったため、さらに金曜日の4時から5時の枠を増やし、図1で*のついた部分が高校生にオンライ

ンで公開された。

時間帯を放課後に設定し、Zoomというビデオ会議プラットフォームによるオンライン参加にし、英語力に関する制限はつけず、各校の教員の推薦による、とした。最初は1セミナーあたり、5～10名とし、各校の担当教員が割り振りを行ってくれたが、進行するにつれて、より多くの参加を受け入れ、オンラインと教室両方のハイブリッド型になっていった。大学生は大学のELのセミナールームから、高等学校の受講生はZoomのオンラインで受講した。

表1

2021年度前期開始当初の高大連携事業企画書の一部

時期	令和3年度5月半ば～8月初(本学前期)
曜日・時間帯	火～木曜日 ELセミナー4限(5時40分から6時40分) 金曜日 ELセミナー3限(4時から5時)
形態	オンラインによる参加
英語力レベル	特に問わない (学生の担当教員の推薦を必要とする)
人数制限	1セミナーあたり5～10名ほど
科目説明	アカデミックリサーチの方法 外国語で研究を行うための基礎知識を、あらゆるレベルの経験者を対象とし、研究とその方法を理解する ヨーロッパの留学 本学に就学中の留学生や、日本人の留学経験者の体験談を交えながら、教員のバックグラウンドであるヨーロッパへの留学について語る 実用的な翻訳スキル 英語と日本語の新聞記事を読解・分析して、グループで日本語ニュースの英訳に挑戦する TOEFL ITP 文法問題 TOEFL ITPテストの文法問題を中心に教員独自作成による設問を使い、学習する

図1

2021年度前期ELスケジュール表

HIROSAKI UNIVERSITY English Lounge		2021			
English Lounge CONVERSATION Space Schedule					
TIME	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY
10:30-12:00	SELF-STUDY	SELF-STUDY	SELF-STUDY	SELF-STUDY	SELF-STUDY
12:00-13:00	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students
13:00-14:00	CLOSED for Lunch				
14:00-Last Seminar	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students	CLOSED	Conversation with Exchange Students	Conversation with Exchange Students
English Lounge SEMINAR Space Schedule					
10:30-11:30	CLOSED	CLOSED	CLOSED	CLOSED	CLOSED
12:00-13:00	BRIAN English in the NEWS	REIK Advanced Conversation	JOSHUA TOEIC Vocabulary and Activities	MEGUMI Glee! Season 1	International Exchange Activities
13:00-14:00	CLOSED for Lunch				
14:30-15:30	SANAE English Activities for Beginners	MEGUMI TOEFL ITP Reading Part	BRIAN TOEFL Practice	JOSHUA Reading US History	REIK European History
16:00-17:00	BRIAN Medical English	MEGUMI Glee! Season 1	BRIAN Learning English with YouTube	JOSHUA Discussing Visual Arts	REIK* Studying Abroad in Europe
17:40-18:40	CLOSED	MEGUMI* Grammar Q's for TOEFL ITP (Online)	REIK* How to do Academic Research (Online)	JOSHUA* Practical Translation Skills (Online)	CLOSED

Grammar Q's for TOEFL ITP 「TOEFL ITP文法問題」(担当：多田恵実)

基礎的レベルの受講生の受け皿として、TOEFL ITP文法問題を設定した。配信授業であることから、著作権に配慮し教員独自の問題を作り、パワーポイントファイルで提示した。

TOEFL ITPテストを選んだ理由としては、1)基礎の文法を取り上げることによって、土台固めをすること、2)高等学校で学ぶ英語の「論理・表現I, II, III」と共通のものがあること(文部科学省, 2018)、そして3)本学の海外協定校との留学プログラムがTOEFL iBTではなく、TOEFL ITPのスコアを利用して選考が行われること、という3つの理由があった。特に3)については、大学生はもとより、高校生の大学入学後の目標設定に役立つので、受講生にも周知を図った。

ポキャブラリーを増やしたいという望みは、ターゲット言語の学習者にとって今も昔も大きな課題である。そこで、基礎的な語の成り立ちや構造を習得することにより、語彙を増やす技術を伝えられると考え、文法問題だけでなく、語源や接頭辞、語幹、接尾辞の意味を取り上げる部分を入れていった。

考察

高校生のアンケートから、「TOEFLのレッスンで、どの語がどのような意味を持つのかということを知ることができ、単語を覚える際にそれらを意識することでずんずん理解することができました。」「私は主に火曜日のラウンジを受けました。その中で形容詞の構成や接頭辞の意味など詳しく知り、初めて見る単語でもおおよその意味を推測できることが増えました。また、解説がとても分かりやすかったです。このラウンジに参加したことでより英語に親しみ学習意欲が向上したように思います。」「今回もやっていただいていたTOEFLのレッスンをまたやっていただきたいです。」等の声があり、ある程度意図したところは外れなかったようである(付録I参照)。懸念としては、TOEFL問題として筆者が作った問題は、オンライン授業で60分の時間で終わられるわかりやすさを主に意図して作成したところから、受講生には基礎的に過ぎる部分があったかもしれないが、実際の設問の方向性を見ていくためには参考になったのではないかと考えられる。

How to Do Academic Research 「アカデミックリサーチの方法」(担当：Reik Jagno)

学生が研究の感覚を身に着けることを手助けするため、このセミナーには二つの中心となる要素があった。現存する様々な主題の例となる論文を使い、基礎研究を行うこと、主題の見つけ方から、その洗練の仕方、資料の集め方から書き方の戦略までの基礎的ガイドを展開していった。これらの目標を深化するため、新しく学んだ方法を参加受講生の直近の課題に応用する部分も取り入れた。高校生に、大学生活の一端を見せ、また高度な話題でリスニングやスピーキングのスキルを訓練することをねらいとした。

Study Abroad in Europe 「ヨーロッパの留学」(担当：Reik Jagno)

このセミナーはヨーロッパとその地域の文化と、留学したい学生が考慮すべき一般的な動向を提示して、受講生が文化についての知識を高め、同時にリスニングやスピーキングのスキルを訓練できるよう、構想した。このセミナーの当初から、留學生のインタビューを含むことを想定し、質問やインタビューの戦略を担当教員の監修のもと、学生がその知見を広めることができるよう、計画された。このELセミナーの第一回目はオープニングとして、セレモニーも一緒に行い、弘前大学の社会貢献の記事として新聞記事にも取り上げられた(付録II参照)。

考察

担当教員として二つのセミナーが始まる前から、大学生がより指導的立場につくよう、高校生と積極的に関わったり、導いたりするように、大学生に指示を与えていた。いかにこのセミナーでの経験がブ

レゼンテーションや、教生としての教育実習に役立つかという感想を大学生が述べてくれたおかげで、高校生がクラスで話し始めやすい雰囲気を作ることができた。高校生がクラスになじむためには、教員だけではなく、こうしたほぼ同世代の学生の手助けが役に立つ。高校生受講者に届けられた知識は、またひとつ学年のレベルが上がった大学1年生にも有効である。高校生との違いを認識し、高校生の先輩として見做された大学1年生は、後輩である高校生と一緒にセミナーに参加して対比することにより、一年生の自信を付けさせることに役立った。最初のクラスの観察から、筆者は受講生の経験をより豊かにするためには、実用的な部分をもっと強調する必要があるのではないかと考えた。幅広い地域の留学生を紹介することにより、出席者は常時10~11人を保持し、ほとんど変わることがなかった。受講生アンケートの記述の中にも「英語のリスニングの成績が上がった」「生の英語に触れることが出来て面白い」「英語で話す練習が出来てうれしい」「英語をこれだけ身近に使える機会はあまりないのでとても興味深かったです」との声が出た（付録I参照）。

Practical Translation Skills「実用的な翻訳スキル」（担当：Joshua Solomon）

このセミナーのそもそもの目的は新聞記事の翻訳に必要な読解力と創造性を育成することだった。翻訳は、一般的な四技能の英語授業では理解を確認するため、「grammar translation method」（文法・翻訳教育方法）のツールとして使用されることが多いが、翻訳そのものをスキルとして教えることは四技能に焦点を当てる授業に不適切だと考えられる。また、日本における英語教育が「実用性」を強調しているせいで学生は「文学的」言語を学習する機会が少ない（Hall, 2015）。そこで、ELセミナーの柔軟性を生かし、実用性と文学性を混合させるべく、以前担当したことのある「詩の翻訳」のセミナーの経験を踏まえて、「実用的な翻訳スキル」に挑むことにした。

セミナーの最初からの概要は以下の通りである。まず、ポピュラーな課題（例：はやりの食べ物、アニメ、テレビゲーム、意外な観光の場所、等）を取り上げる英語ブログ「Sora News 24」（www.soranews24.com）と姉妹の日本語ブログ「Rocket News 24」（www.rocketnews24.com）から一つずつの記事を参加者に選んでもらう。外国人向けに日本のポピュラーカルチャーを発信するブログなので、それに触れることにより日本人の学生は海外の若者の価値観や日本観を知ることにもできる、との考えで選んだ。英語の記事をクラスとして読み、そのブログでよく使われているカジュアルな英語表現、韻を踏む文句、冗談などについて気付かせて一緒に学習する。それから日本語の記事の見出しに対してクリエイティブな英訳を一人ずつ挑んで、比較しながら評価する。

考察

オンラインで受講する生徒はZoomの使い方に慣れていないためか、スマートフォンの小さな画面を使っているためか、タイピングの速度が意外と遅く、学生に記事を選んでもらうことは過剰な時間がかかり、結局教員が事前に決めることになった。また、英語の記事の内容理解確認は時間がかかり、一時間以内に相互理解確認しながら一つの記事を読み切ることができなかった。ただし、最後まで読むことにより、参加者と内容について質疑することに価値があると感じ、全ての出席者が話せる機会を意図的に増やした。つまり、読解と翻訳に加え、ある程度英会話練習の場となったのである。また、学期の途中から生徒はSora News 24とRocket News 24で取り扱っているポピュラーカルチャーに飽きてきたので従来のニュースサイトを用いることもあった。肯定的な結果として、それにより受講生はもっと多様な言語表現や見出しの書き方に触れることができた。ハイブリッド型ではあったが、予想したほどの不便はなかった。対面で受講している学生は大きな画面に向かって座り、ウェブカメラに映した。教員は学生と画面の間に座り、それぞれの受講生の名前を呼びながらセミナーを進めた。記事を大きな画面で対面の学生に見せながらZoomに画面共有した。対面の出席者の翻訳を集めてZoomのチャットに書き写し、Zoomで受講している生徒の翻訳は各自がチャットを使って共有した。そして分析・評価の際、教

員がそれらを読み上げながら様々な「翻訳判断」と文法や語彙などについて全員に意識させた。このセミナーに参加していた本学の学部生はハイブリッド型だったことや高校生と一緒に学ぶことを肯定的に捉えていたそうだが、インターネット上での反応の遅さや一部の高校生の言語能力のレベルの違いで不満を感じる学生がこれから出ることは想像に難くない。

この経験から少人数のハイブリッド型セミナーに少し自信がついた。できるだけインターネット上の参加者の技術的な負担を減らすことが大事だということが分かり、自分でホームページに移動させるなどの代わりに、すべての操作を画面共有で行ったほうが効率的だと考えられる。また、スマートフォンのユーザーが多いと常に想定してタイピングの量を制限するほうが確実である。

前期セミナーを振り返って

セミナー運営にはEL教員全員参加の協力のもと、打ち合わせを行い創意工夫がなされた。各高等学校担当教員との打ち合わせはZoomのオンライン会議を使い、EL教員全員と複数回行い、日々の細かい連絡は多田が担った。例えば、スケジュール設定に関しては、開始前にすでに本学内でのELのスケジュールが決定してしまっていたこともあり、高等学校の授業時間と部活動の時間との微妙な兼ね合いがあったが、実施するうち結果的には校内で参加する生徒より、遅い時間のセミナーは帰宅してからゆっくりと自宅で参加する生徒が多かったことがわかった。

先に述べたようにコンテンツとしては、大学進学を促すような、興味・関心を持てるようなトピックを用意し、ELの特性を活かした。講義形式ではなく、Zoomを使って双方向でやり取りができるようなセミナーを心がけた。両校の生徒からの感想は概ね好評で、付録Iを参照されたい。前期の各校の登録者人数は表2前半に示す。

表2

2021年前期～9月の参加人数と各校の登録人数

参加人数総計	延べ369名
2021年度前期登録人数	
青森高等学校	12名（内、2年生8名、1年生4名）
八戸高等学校	51名（内、3年生25名、2年生8名、1年生18名）
	総計 63名
9月特別ワークショップ登録人数	
青森高等学校	17名（2年生）
八戸高等学校	57名（2年生54名、1年生3名） 計57名 総計 76名

9月特別ワークショップ

概要

9月の週末、2週にわたってZoomを使って行われた高校生ワークショップは表2に示すように、多くの生徒の参加を集めた。前期セミナーのアンケートからは、二つの側面が見て取れる。高校生はクラスを楽しみ、更に先に進みたいと思い、セミナーで新しく獲得したスキルを実際に使ってみたいとの思いがある。前期の4つのセミナーで培った力を強化する目的でELは新しい夏季講座を企画した。青森・八戸各高等学校担当者からのフィードバックによれば、1時間半の週末の講座が適切に思われたので、前期のセミナーのテーマである翻訳、文法、スピーキングとインタビューを考慮にいれて、目標はアカデミック・ポスター制作と決まった。このプレゼンテーションの重要点としては、外国人をインタビュー対象者に設定したことである。このプロジェクトは好意的に受け入れられ、両高等学校合わせて

76人の受講希望者が登録をした。この多数の人数を考慮し、5つのグループに分けたうえでインタビュー対象者が選ばれた（表3）。

表3
9月高校生ワークショップ 担当者表

調査国名	担当教員	留学生
アメリカ	Joshua Solomon	
ドイツ	Reik Jagno	
ハンガリー	Orsolya Jagno (1週目, 2週目), Brian Birdsell (2週目)	
インド	片桐早苗	Koshi Matthews
バングラデシュ	多田恵実	Most Farzana Haque

主題文 (thesis statement) とインタビューのスキル (情報を得、追加の質問をし、リサーチを始動し、口述歴史背景を取ること)、及びポスタープレゼンテーションが主な目標スキルである。アカデミックポスタープレゼンテーションが、限られた時間内での実行可能な安定した学問的レポーターとして選ばれた。

受講生に様々なグローバルイングリッシュ (世界英語) を提示するため、ELはインタビュー相手をアメリカ、インド、バングラデシュ、ハンガリー、ドイツから選んだ。全ての国が良く受け入れられたが、驚くべきことではないがアメリカが、受講生に最も多く選ばれた国だった。イベントのアウトラインは表4のようになる。

表4
9月高校生ワークショップ企画

第一週	
導入	<ul style="list-style-type: none"> 全体で前期セミナーの復習 (インタビュースキル・主題文について)
アカデミックリサーチについて	<ul style="list-style-type: none"> 全体で講義を聞き、リサーチの方法について学ぶ 国別にグループを作る
インタビュー開始	<ul style="list-style-type: none"> 国別のブレイクアウトルームに入る
第1段階	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な質問を行い、リサーチを始めるためのキーワード (主題) を探す (得た情報はGoogle Docsにメモし共有)
第2段階	<ul style="list-style-type: none"> グループで主題を決める
第3段階	<ul style="list-style-type: none"> 決定した主題について、さらに掘り下げる質問を行う 各生徒が副主題を選択し、翌週までにリサーチを行う
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 全体で来週行うことを確認
第二週	
ポスター作製について	<ul style="list-style-type: none"> 全体で講義を聞き、学術的なポスターの作成方法について学ぶ
ポスターの作成	<ul style="list-style-type: none"> 国別のブレイクアウトルームに入る 各生徒がリサーチしてきたことを共有 Google Slidesで提供された枠組みを利用し、ポスターを作成 プレゼンテーションの練習
ポスタープレゼンテーションの実施	<ul style="list-style-type: none"> 全体で各プレゼンテーションを行う 質疑応答を可能な範囲で行う

第一週

復習の部分は、これまでに前期セミナーで学習したスキルを思い出させ、知識をリフレッシュさせるためのもので、1週目の残り時間はグループワークに費やされる部分だった。留学生がインタビューの受け手であるグループは、日本人教員が担当し、インタビューをスムーズにするように図られた。プラットフォームとしては、Zoomは通信に問題なく使用でき、Google DocsがPCではサインインなしに編集できたので、グループワークに使用する予定だったが、生徒の大半がスマートフォンかタブレットで参加したため、Googleアプリを要し、使用開始までの設定に時間を必要としたため、この決定には問題があることがわかった。従ってGoogleのプラットフォームを生徒とスムーズに使うには、より多くの前もっての準備が必要だった。さらにまた、Zoomの問題点があり、入室できない生徒が20分ほど待たされた。これに対処するため、ワークショップは時間延長され、Google Docsを使ってのインタビューの過程はいったん棚上げされた。

2週目はソロモンの「ポスター制作の方法」の講義から始まった。以下は、教員の考察を含む各グループの概要である。

第二週

アメリカ合衆国 (担当: Joshua Solomon)

アメリカ出身の教員をインタビューするグループは、Google Docsを用いて更に小さなグループを決め、それぞれのグループが自分のインタビュー課題を話し合いで選び、それからインタビューをグループ毎に、段階的に行う予定だった。ところが、参加者はGoogle Docsがちゃんと使用できず、教員にそのことをずっと知らせなかったため貴重な時間が失われた。結局、担当教員が手動でグループを作り、課題を出して生徒をブレイクアウトルーム（個別会議室）に移動させたものの、どのルームでも沈黙だった。「これは大学だから、大学生のようにリーダーとなって、能動的学習するんだよ」と促しても動きがなかった。結局、インタビューの質問がほとんど日本語でチャットにて決められた。インタビューの際は代表者が頑張って英語で質問をし、メモをとった。質問はそれぞれアメリカの文化や歴史についてだった。技術的な問題におつかってからすぐに、最初の計画を全て破棄してインフォーマルなインタビューに飛び込まなかったことに深く反省している。二週目の時はインターネットのアプリの問題が解決されたので、Google Slidesを使ってポスターを作成することができた。最初は前と同じグループに分けて一週間の休みの間に自分で調べた情報を共有するように指導した。そして一人が共有した情報を全員がアクセスできるGoogle Docsに貼り付けるように指示した。メモとポスターが少しずつ共同作業で形になり、3人の志願した発表者が読み上げの練習に入った。プレゼンテーションの時、最初の発表者は緊張のためか、次の発表者のところを読んでしまった。全体での発表練習の必要があると考える。

バングラデシュグループ (担当: 多田恵実)

バングラデシュからの本学農学生命科学部大学院留学生、Farzanaさんには10名の受講生がインタビューを行った。1週目の技術的な混乱から何人かがブレイクアウトルームに入れなかったことから、連絡調整を行い、各高等学校からの希望者をそれぞれのブレイクアウトルームに配置した。2週目にも予定外で参加してくれたFarzanaさんに、ブレイクアウトルームで独自に2度目のインタビューを敢行した受講生もおり、受講生自らが大いに積極性を発揮していた。

高校生が選んだトピックは国旗、スポーツ、食べ物、バングラデシュ国内で今一番人気があるもの、などのごく一般的なものだったが、国旗の話からFarzanaさんがバングラデシュの民族間の困難な歴史について触れ、高校生の中に大きな気づきがあった。民族の違いを超えて平和を構築することがいかに大切なことかと改めて考えさせられた機会になったのではないかと考える。

2週目のポスター作製は、短い時間ながらもJagnoが用意したテンプレートに記入することで、時間

調整しながら何とか完成することができた。機器の違いから、直接Google Docsに書き込むことができなかった生徒には、教員が手を貸して聞き書きをし、書き込んだ。プレゼンテーションそのものは、ワークショップ当初から発言が多く積極的な生徒が司会をし、英語で仕切中、全体に堂々といわれ、高校生の底力を見た思いがした。

インドグループ (担当：片桐早苗)

両セッションで、インドのグループを担当した。このインドグループには、本学農学生命科学部大学院在籍のKoshi Matthewsさんに参加してもらい、インタビューに答えていただいた。

初回セッションでは、それぞれの参加生徒がインドに対して探求してみたいトピックを見つけること、2回目のセッションではそれを共有して一つのポスターを完成することが目標であった。両セッション共にその目的はおおむね達成できたと考える。

高校生の使用デバイスの違い、また技術の習熟度の違いにより、初回時は予定の時間を上回ったが、2回目のセッション時には解消され、スムーズにメイン会議からインドのブレイクアウトルームに移動できた。同じく、使用デバイスの違いから、Google Docs/Google Slidesへの書き込みができる生徒と、そうではない生徒がいたことから、このような学術ポスターを作成するという目的を達成するためには、PCあるいはiPadでの参加が望ましいことを、双方の共通認識とする必要がある。

内容面からの改善点としては、生徒のより積極的な参加を促進することが考えられる。当初は参加者の中からグループリーダーを決め、さらにトピックごとにサブリーダーを決め、そのなかで方向性を決め、インタビューを行う予定であった。しかしながら、時間的制約のなか、その場でグループを形成し、簡単な自己紹介だけでメイン活動を始めなくてはならない状況であり、生徒のリーダーシップを引き出しきることができなかった。また、共有ドキュメントとしてGoogle Docsを使用したか、お互いが同時に書き込むことができるというメリットを生かすことができなかったことから、より生徒同士のインタラクションを促進するような仕組みの構築が求められると考える。

ハンガリーグループ (担当：Brian Birdsell)

メディア授業は予想以上に時間がかかり、今回の高等学校のワークショップでもそれは同じだった。ハンガリーグループでは、ハンガリー出身のOrsolya Jagnoと一緒に協力したので、ハンガリーの様々な文化的側面についての情報を提供してもらった。ハンガリーは、おそらくほとんどの学生にとって馴染みのない国のひとつであった、そのため刺激的であると同時に、背景知識がほとんどないため、受講生にとっては少し難しかった。温泉文化や教育などをテーマに、日本とハンガリーの共通点や相違点を比較しながら探ってもらおうとした。最終的には、時間の制約もあり、学生たちはハンガリー料理の研究を選んだ。そこで、生徒たちの中で責任を分担し、それぞれの生徒がハンガリーで一般的に食べられている朝食、昼食、夕食、デザートについて詳しく調べた。その後、研究結果をGoogle Slidesにまとめ、各人がグループ内で発表した。

今回の活動を振り返ってみると、ポジティブな点もあれば、難しかった点もある。ポジティブな点では、学生たちは自分たちがほとんど知らない国について遠隔で学ぶ機会を得たこと、テクノロジーをより使いこなせるようになったこと、英語で交流し、練習し、研究を発表する機会を得たことなどが挙げられる。課題としては、音やカメラの問題など、テクノロジーは常にどんな活動にも複雑さをもたらす。さらに、外国語を学ぼうとしているときに新しいテクノロジー（Zoomやプレゼンテーションソフト）を使うことは、学習者の「認知負荷」が高まり、それは学習活動に問題を引き起こす可能性もある。

ドイツグループ (担当：Reik Jagno)

全体の会議から、それぞれ国別のグループに入ることは問題なかった。その中で行ったグループワー

クにはいくつかの側面があり、次回はそれを改善する必要がある。まずは、グループ内の組織をもっと整理する必要がある。一人の学生が最終決定権を持ち、グループの代表者として行動するようになることである。私たちはこのシステムを構築するつもりだったが、ZoomとGoogle Docsに関する技術的な問題に時間を割かなければならず、十分ではなかった。最終的には、学生たちはいくつかのトピックを見つけ、導入したポスター発表のテンプレートを活用することができた。見つかった重要な問題は、学生が見つけた情報を、意味のある一貫した形で使うという問題であった。担当教員のガイダンスのおかげで、学生たちは自分の努力により収集した情報を整理し、2日間のワークショップの最後には学術ポスターを発表することができた。

ワークショップを振り返って

前述のように、使用している機器の違いから、1日目に接続と、共有ドキュメントに書き込めない等のトラブルがあったが、適切な指示と指導を行った結果解消されて、その後はなんとかスムーズにZoomへの接続、各グループワークを行うことができた。

実施後アンケートでは、青森高等学校17件、八戸高等学校38件の計55件の回答を得、1から4のスケールで、ためになった3.44、興味深かった3.31といずれも高評価を得た。また、複数回答226件のうち、最も良かったところとして「英語で話すことができた」(36件)、2番目に「各国の歴史や事情について学んだ」(32件)が挙がり、ほかにも「先生と話すことができた」(24件)、「留学生と話すことができた」(21件)など、教員や留学生と英語でコミュニケーションができた様子がかがえ、コメント欄回答からも難しさを感じながらも、楽しみながら対話ができたと感想が見られた。

ほかにも「ポスター作製の方法がわかった」(24件)、「リモートでポスターや文書を見ることができた」(24件)ことから、オンラインでの講義を聞き、インターネット上で参考文献を探すスキルを磨く機会があったことがわかる(付録III参照)。

各高等学校の先生方からは、それぞれ「生徒は夢中になって画面をのぞきこみ、英語を話しておりました。」「高等学校では指導できないような高度な指導をして頂き、ただただ、感謝するばかりです。ありがとうございます。」との声が寄せられた。生徒にとって有意義で、更なる意欲を引き起こすワークショップになったものと推察する。

まとめと今後の展望

前期セミナーおよび9月特別ワークショップを通じて、オンライン技術と、学内のリソースを有効活用し、弘前大学として地域に貢献するスタンスを示すことができた。ELの特性を活かし、双方向型のインタラクティブなプログラムの開発の基礎ができたことは意義深い。オンラインセミナーという形で物理的な距離を超え、地元以外の青森県内の遠方の学校からでもつながることができる、ICT技術の活用の方が見えてきた。

またオンラインセミナーの門戸を開くことで、高校生が教員とだけでなく、在学中の大学生と留学生とのやり取りができる、いわば体験入学的要素も持てる可能性が広がった。さらにはJagnoのセミナーで言及しているように、高校生と関わることで本学の学生も先輩としての主導的な役割を果たすことができ、大学生にとっても学ぶところが多かったことが推察される。

今後の展望として高等学校側からは、よりコミュニケーションをという要望があり、スピーキングやリスニングに重点をおいた後期のELセミナーの公開を計画している。

こうした試みはすべて、大学の知と、地域をつなぐハブになる可能性を強く感じるプロジェクトとなったことを報告し、まとめとしたい。

謝 辞

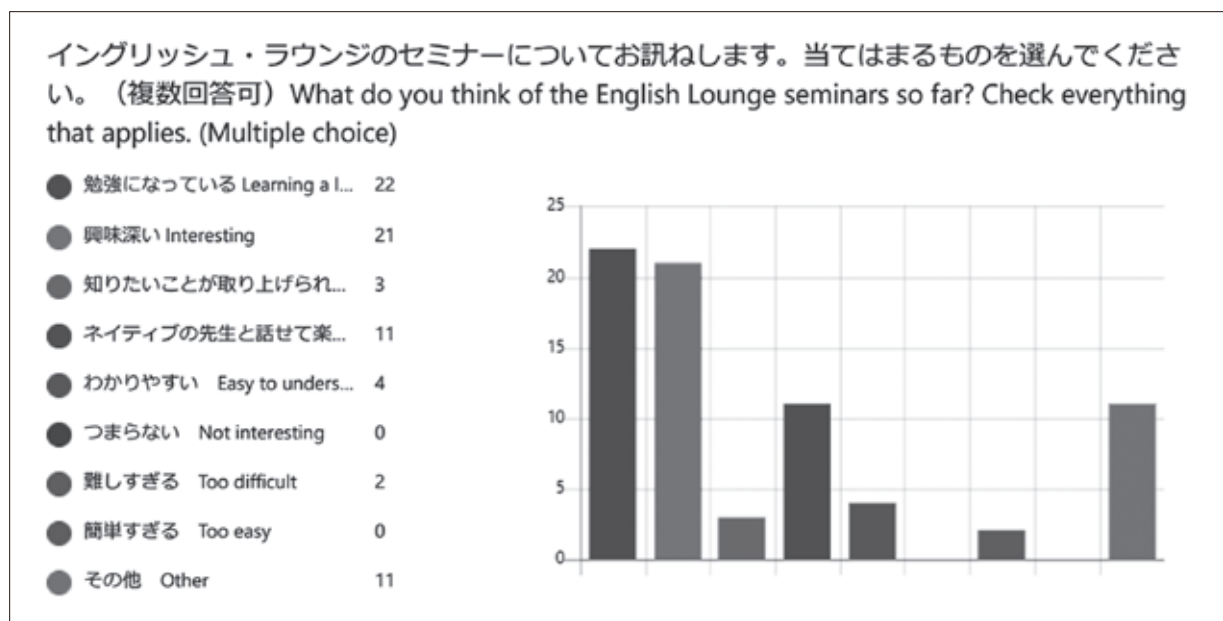
この企画の発案者、郡千寿子本学教育担当理事・副学長、岡崎雅明教養教育開発実践センター長、長南幸保アドミッションセンター長、また企画運営に協力いただいた、元青森高等学校校長 宍倉慎二本学教育学部教授、青森高等学校 菊池真理子教諭、八戸高等学校 吉田直正教諭、インタビューに協力いただいた Orsolya Jagno さん、Koshi Matthews さん、Most Farzana Haque さん、セミナーとワークショップに参加した青森高等学校、八戸高等学校の生徒の皆さんに感謝申し上げます。

引用文献

- Hall G. (2015). Recent Developments in Uses of Literature in Language Teaching. In Teranishi M., Saito Y., Wales K. (Eds.), *Literature and language learning in the EFL classroom*. (pp. 13–25). Palgrave Macmillan, London. https://doi.org/10.1057/9781137443663_2
- 鈴木久雄. (2018). 「大学から見た学習指導要領」. 『物理教育』, 66 (3), 212–216.
- 弘前大学. (2017). 「国立大学法人弘前大学と青森県教育委員会との連携に関する協定書」. 弘前大学. https://www.hirosaki-u.ac.jp/research/chiikirenkei/aomorikenkyoui_h270224.html
- 文部科学省. (2018). 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説平成 30 年 7 月外国語編英語』. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf
- 文部科学省. (2019). 「GIGA スクール構想の実現について」. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm
- 文部科学省. (2021). 「教育再生実行会議ポストコロナ期における新たな学びの在り方について（第十二次提言）」. 文部科学省. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai12_teigen_1.pdf

付録

I. 前期ELセミナーアンケート（回答総数26件）



注. 項目凡例はそれぞれ上から順に、棒グラフの項目を左から順に表す。

A. 上記「その他」に記載の自由記述欄の感想（抜粋）

1	英語のリスニングの点数が上がった。
2	生の英語に触れることができ面白いです。
3	他の人の意見が聞けて参考になる
4	英語で話す練習ができて嬉しい。
5	いろんな単語を覚えた。
6	大学生と一緒に勉強できて刺激になる。
7	私の英語力の不足が原因だと思いますが、なんとおっしゃっているのかわからず話の内容が理解できないことがあって、悔しかったです。
8	高校とは違った切り口で英語を学べる。
9	オンラインで気軽に参加できるのがよい。
10	弘前大学の方がたとコミュニケーションを取ることができて楽しい。

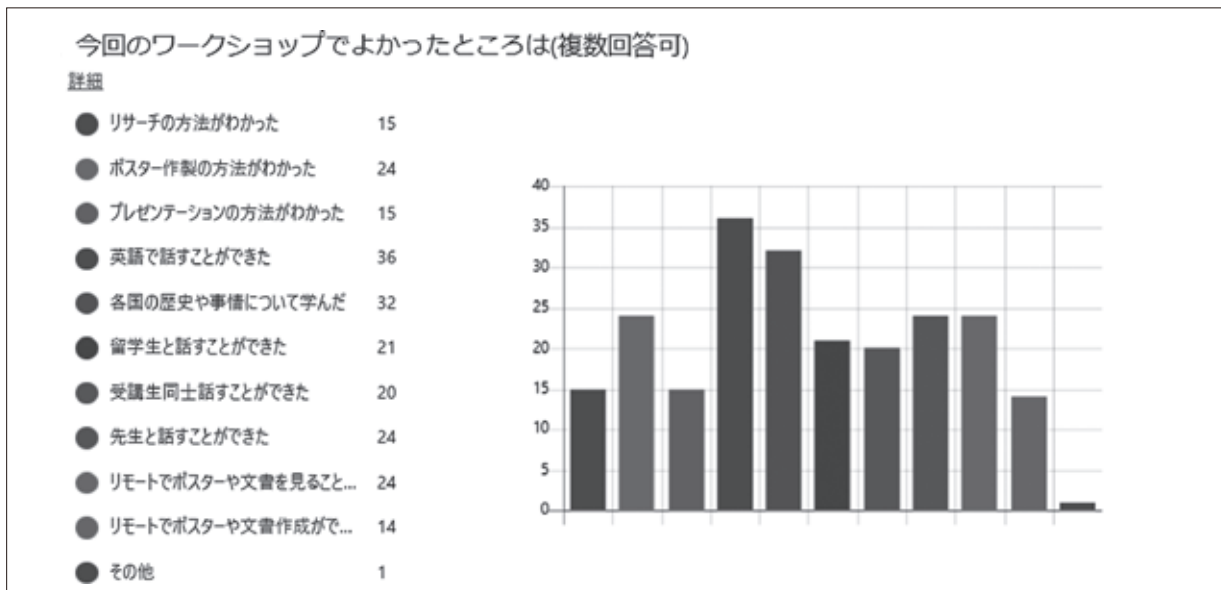
C. セミナーへのコメント・感想・質問など（原文のまま）

1	毎週楽しく受けさせていただいています。ありがとうございます。これからもよろしく願いいたします。
2	あまり参加できなくて申し訳ないです。参加させていただいたときは、とても楽しく勉強できました。発言をするときはとても緊張し、ちゃんと答えられていたか不安ですが、丁寧に教えて下さり、少しリラックスして話すことができました。時間が合えば、ぜひまた参加させていただきたいです！
3	TOEFLのレッスンで、どの語がどのような意味を持つのかということを学ぶことができ、単語を覚える際にそれらを意識することですんなり理解することができました。また、今回はzoomに慣れていなかったこともあり、あまり積極的に発言することか出来なかったのも、またこのような機会を設けていただけるのであれば、次回はもっと積極的に発言できるようにしたいです。
4	直接顔を合わせることができない状況下だとしても、むしろオンラインの方が時間もお金もかからないので、効果はあると思う。
5	私は特に火曜日の文法や語学が楽しかったです！私の英単語やリスニング力の不足が原因だと思いますが、セミナーでも学校でもなかなか先生がおっしゃっている内容を理解できません。話の内容が分からないから、先生にあてられてもなんと答えればよいかわからなかったりします。でも英語力をつけて、自分の考えを伝えたり、相手の話を理解したり、将来的には世界に貢献したいです。どうしたら英語力をつけられるか教えてほしいです！お願いします！
6	英語をこれだけ身近に使える機会はあまりないのでとても興味深かったです。
7	遅れてしまいすみません。イングリッシュ・ラウンジでは様々な知識を自分にいただくことができ、本当に勉強になっています。大学生の皆さんもとてもフレンドリーで、私の質問に対しての熱い助言が本当に嬉しかったです。イングリッシュ・ラウンジに参加することが、私は改めて有意義だと感じました。弘前大学の先生方や大学生の方々、本当に有難うございます。
8	私は主に火曜日のラウンジを受けました。その中で形容詞の構成や接頭辞の意味など詳しく知り、初めて見る単語でもおおよその意味を推測できることが増えました。また、解説がとても分かりやすかったです。このラウンジに参加したことでより英語に親しみ学習意欲が向上したと思います。

II. 新聞記事 (デーリー東北新聞社により著作物使用および転載許可許諾済み)



III. 9月特別ワークショップアンケート (回答総数55件)



注. 項目凡例はそれぞれ上から順に、棒グラフの項目を左から順に表す。

自由記述欄の感想（原文のまま）

1	話を聞き取れず、不甲斐なくて寂しかったですが、この悔しさを忘れないようにしたいと思います。貴重な経験をありがとうございました。
2	日本人の先生がいてくださってとても心強かったです。もっと英語を自由に話せるようになりたいと思いました。
3	とても楽しかったです。貴重な経験になりました。本当にありがとうございました。
4	とても楽しい時間を過ごすことができました。自分は英語が得意な方だと思っていたのですが、今回自分よりもレベルの高い方々とお話してみて、もっともっと英語のスキルを身につけたいと思うことができました。また機会を設けていただけたら是非参加したいです。
5	ポスター作成の時うまく画面が動かなかったり、入れたかった内容が書き込めなかった。
6	1日しか参加できなかったので次は最後まで参加したいです！
7	反応があまりできなくて、講師の先生方を困らせてしまう事が多くとても申し訳なく思っています。次回は、怖がらずに積極的に会話をしたいと思います。
8	非常に興味深い活動でしたが、個人間で話せないことに不便さを感じました。